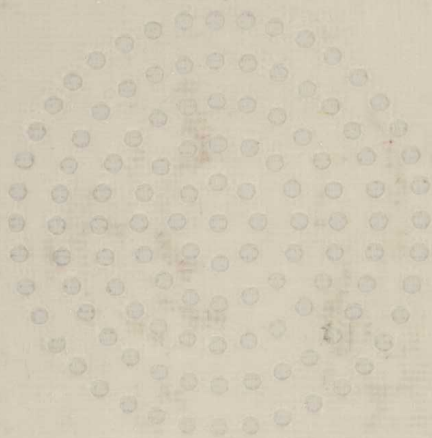
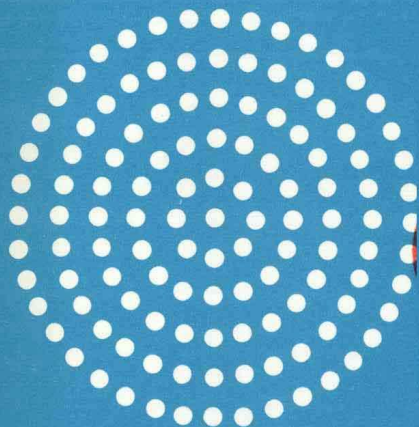




世界の詩集 20

ネルーダ詩集



大島博光訳

訳者 大島博光

1910年、長野県松代町に生まれる。早稲田大学仏文科卒業。詩人。

〔主要著訳書〕『フランス近代詩の方向』(山雅堂), アラゴン『フランスの起床ラッパ』(三一書房), 『エリュアール詩選』(緑書房), 『アラ
マと愛の讃歌』(東邦出版社)



世界の詩集

20

ネルーダ詩集

昭和四十七年十月二十日初版発行
昭和五十年十一月二十日三版発行

訳者 大島博光
おおしまひろみつ

発行者 角川源義
かくがわげんぎ

発行所 角川書店
かくがわshoten

東京都千代田区富士見二ノ十三
●東京一九五二〇八●一〇二
電話東京(三六五)七二一(大代表)

写植 株式会社 写研

製版 植竹プロセス製版株式会社

印刷 曉美術印刷株式会社

製函 三真堂印刷紙器株式会社

製本 株式会社 鈴木製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします

0398-590320-0946(1)

目次



たそがれの書	七	フェデリコ・ガルシア・ロルカの思 い出	二七
橋	七	心のなかのスペイン	三〇
廿の愛の詩と一つの絶望の歌	九	そのわけを話そう	三二
女の肉体……	九	死んだ義勇兵の母親たちに捧げる歌	三六
おれは詩を書くことができる……	二一	アルメリア	四〇
指 輪	二四	地上の住みか 第三卷	四四
少年時代の田舎	二四	スターリングラードにささげる新しい 愛の歌	四八
無限なる人間の試み	二六	大いなる歌 第一卷	五三
六 月	二六	マチュ・ピチュの頂き	五五
地上の住みか 第一卷	二八	マチュ・ピチュよ	五五
フェデリコ・ガルシア・ロルカへの オード	二八	兄弟よ 立ちあがって来い コンキスタド레스 征服者たち	五七
講 演	三〇	インカの最期	六〇

解放者たち

六三

解放者たち

六三

ソッコロの蜂起者たち

六六

マニユエル・ロドリゲス

七二

大いなる歌 第二卷

七五

寡頭政治

七五

天上の詩人たち

七五

ユナイテッド・フルーツ
Co.

七六

乞食たち

八二

ラ・ブラサの死者たち

八四

ラ・ブラサの死者たち

八四

虐殺

八七

どのようにして旗は生れたか

九〇

エイブラハム・イエズス・ブリトオ

九二

きこりよ めざめよ

九五

I

九五

IV

一〇三

V

一〇〇

VI

一二三

逃亡者

一二六

I

一二六

III

一三〇

V

一三三

大いなる歌 第三卷

一三八

歌の河

一三八

スペインの刑場で殺されたミゲル・エ

ルナンデスへ

一三八

ラファエル・アルベルティへ

一三三

わが来歴

一四五

辺境

一四五

家

一四八

ぶどう酒

一五〇

大きな悦び

一五三

死

一五五

遺言 (I)

一五八

遺言 (II)

一六〇

手筈

一六三

わたしの党に

一六六

海へのオード

一六七

ぶどう畑と風

一六九

パンへのオード

一九五

ぶどう畑と風

一六九

マチルドよ……（一番）

二〇四

歌い手のおれは　さまよった……

一六九

くちづけに辿りつくまで……（二番）

二〇六

ああ　いつ　ああ　いつ　いつ……

一七三

おれの意地悪さん……（二〇番）

二〇八

ユリウス・フチークとの対話

一八一

おまえは　貧乏な……（二九番）

二一〇

I　わが街あるきの友

一八一

……（四八番）

二二三

II　きつとそんな風だったろう

一八三

おまえの笑いは……（五一番）

二二四

III　もしもおれが　きみらに話すなら

一八四

苦悩から苦悩へと……（七一番）

二二六

おれが死んだら……（八九番）

二二八

エレメンタールなオード

一八七

たとえいつか……（九六番）

二三〇

そのとき　どこへ……（九七番）

二三三

解説

三五

年譜

三五

ネルーダ詩集

たそがれの書（一九二三年）

橋

橋——その青い鋼鉄のアーチに來ると

通り過ぎてゆくものたちは さよならを言う

——上の方では 列車が

——下の方では 水の流れが

かれらは長い旅をつづけるのにもううんざりしている

それは 始まってしまえば ながながと続いて

けっして終ることのない長い旅路なのだ

空が——はるか上の方を——空が

そうして鳥たちが 通り過ぎ

休むことなく 旅をつづける

列車や川の流れとおなじように

きみたちの上には どんな悪口が落っこちてくるのか？

濃い長い夜のなかを きみたちは何を待っているのか？

駈けつけた姉のまえで死んだ

子供のように 腕をひろげて

なんという冷淡で陰険な呪いの声が

きみたちのうえにその翼をひろげたことか

列車と 川の流れが

風景や 生活や 太陽や 大地を追って

果てしない旅をつづけるために

そのときにも 身じろぎもせぬ鋼鉄の苦しみは
いっそう地の中ふかくめり込み

釘はいっそう深くつき刺さっていたのに

廿の愛の詩と一つの絶望の歌（一九二四年）

女の肉体……

女の肉体よ 白い丘よ 白い腿ももよ

天の与えたおまえの姿は この世界にも似ている

たくましいおれの農夫の肉体は その鋤すきで

大地の深みから 息子こを躍りあがらせるのだ

おれは深淵のように孤独だった 鳥たちはおれから逃げさり

夜は怖ろしい力で おれに襲いかかった

生き残るために おれはおまえを武器のように鍛えねばならなかった

こうしていまや おまえはおれの弓につがえる矢となり おれの石弓につがえる石
となる

だが 復讐ふしうの時が過ぎて おれはおまえを愛するのだ

なめらかな肌と苔と乳のある 貪欲でどっしりとした女の肉体よ

ああ 壺のような乳房！ ああ 放心したようなその眼！

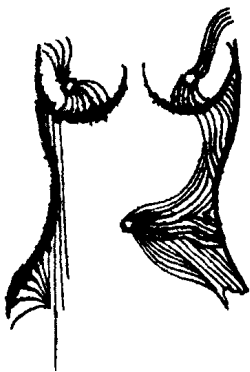
ああ 恥骨のほとりの薔薇！ ああ おまえのけだるそうな もの悲しげな声！

女の肉体よ おれはおまえの魅力のとりことなる

おお この渴き 果てしない欲望 行きつく目的地もない道よ！

ほの暗い河床よ そこに永遠の渴きが流れ

疲れが流れ はてしもない苦悩がつづくのだ



おれは詩を書くことができる……

おれは今夜 世にも悲しい詩をかくことができる

たとえば こう書くこともできる「星の降るような夜だ
はるかはるか遠くで 空の星星が顫えてゐる」と

夜の風が 夜空を吹きまわって 歌っている

おれは今夜 世にも悲しい詩を書くこともできる

おれは彼女を愛していた 時には彼女もまたおれを愛した

今夜のような夜夜 おれは彼女を腕のなかに抱いた

果てしない空の下で おれは幾度となく彼女にくちづけした

彼女はおれを愛した 時にはおれもまた彼女を愛した

彼女の大きな眼を じっと大きく見開いた眼を どうして愛さずにいられよう

おれは今夜 世にも悲しい詩をかくことができる

彼女はもうおれのものではない 失ってしまったのをひしひしと思ひ知る

茫茫とした夜に聞き入れば 彼女のいない夜はさらに茫茫として

草の葉に露がおりるように おれの心には詩がうかぶ

おれの愛が彼女をひきとめられなかったとて しかたがない

星のこぼれるような夜なのに 彼女はもうおれのそばにはいない

それだけのことだ 遠くで誰かが歌っている 遠くで

だが彼女を失って おれの心は うつろなのだ

もうひと目 彼女を見ようとて おれの眼は彼女を探しまわり

心もまた彼女を求めるのに 彼女はおれのそばにはいない

今夜もおんなじ木木が白く照らされて おんなじような夜だ

だが ああ頃の二人と いまのおれたちとはもう同じ二人ではない

たしかに今はもう愛していないが ああ頃はどんなに愛していたことか

風よ この胸の想いを おれの声を 彼女の耳にとどけてくれ

あの声も つややかな肉体かみだも あのぼおとした果てしない眼も
ほかの男のものになるのだ おれの愛したその前のように

ほんとにもう愛してはいないが ひょっとしたらまだ愛しているのかも知れぬ
恋はあんなに短かいのに 忘れるためには こんなに永くかかるのだ

今夜のような夜な夜な おれは彼女を腕のなかに抱いた
だが 彼女を失ってしまって おれの心はうつろなのだ

この苦しみが 彼女ゆえの最後の苦しみであるように
この詩が 彼女におくる最後の詩であるように

指輪（一九二五年）

少年時代の田舎

少年時代の田舎よ おれはロマンティックな露台から 扇のようにおまえをひろげてみる。むかしのように おれは道のまんなかにうつちやられて おなじくうつちやられた道をもう一度たどってみる。おれが夢想にふけてつくりあげた小さな町よ おまえはあの頃と変らぬたたずまいで浮びあがってくる。苔のふちを歩調をとって歩きまわり 大地と草を踏みつけた 少年時代の情熱よ おまえはいつでもよみがえってくる。塗りたての絵具のように みずみずしい青空のしたにうずくまった おれのこころよ おまえだけが石を投げて 夜を追いはらうことができた。こうしておまえは大きくなったのだ 粉がこねられるように 孤独のなかでこねられて 苦しみ悩みに傷ついて さびれた村村を歩きまわって。こんなむかしのことどもを話したり 忘れていたむかしの着物をきてみたとして なんにならう。けれども少年時代の田舎よ おまえの影は濃くて大きいのだ。北風が吹きすぎ 冬枯れの寒さが身を刺す頃の 村の影は濃くて大きいのだ。だがまた 雨期のさなかに 穂